

新・晴れた日 篠山紀信

A New Fine Day: Shinoyama Kishin

2021年5月18日(火) - 8月15日(日)



写真は死んで行く時の記録。

嵐の日も雨の日も

僕が撮る写真は、いつも晴れた日。

篠山紀信

〈晴れた日〉1974年 東京都写真美術館蔵

東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団では、Tokyo Tokyo FESTIVALの一環として「新・晴れた日 篠山紀信」展を開催いたします。

時代の熱量をとらえた写真によって、1960年代から活躍を続ける篠山紀信。数多くの雑誌の表紙やグラビアを手がけ、写真家として時代をつくり出してきました。1974年に『アサヒグラフ』誌で連載され、後に写真集にまとめられた『晴れた日』は、篠山紀信の特徴を凝縮した一冊で、「写真はうまれながらにして大衆性を背負っているメディア」と自身で語るように長嶋茂雄や輪島功一、オノ・ヨーコなど、誰もが知るアイコンをちりばめながら、広範に社会の動きを捉え、昭和という時代の尖鋭な批評となっています。

「新・晴れた日」と題した本展は、この『晴れた日』の構造を使って、二部構成で60年間にわたる篠山紀信の116作品を展覧します。第1部では写真界で注目を集めた1960年代の初期から、『晴れた日』や1976年のヴェネチア・ビエンナーレでも出品された『家』ほか、その後の幅広い活躍の原点となる1970年代までの主要作品で構成。第2部では、1980年代以降の作品を中心に、バブル経済による変貌から、2011年の東日本大震災を経て、2021年に向かい再構築される東京の姿まで、創造と破壊、欲望と不安が相即不離な変化の時代をとらえた作品を紹介します。

本展のみどころ

写真家・篠山紀信の60年間の全活動を再検証する初の大規模回顧展

本展は、1960年代から今日まで休むことなく幅広い分野にレンズを向け続ける、篠山紀信の60年間にわたる活動の全容を一望する初の大回顧展です。

1963年に卒業制作が『カメラ毎日』で取り上げられたことを機に、瞬く間に若手写真家の中でも注目を集める存在になった篠山紀信が、いかにして写真家の枠を超えた「時代の創造者」として広く認知されるようになったのか。誰もがその名前を知る“篠山紀信“という多面体を再検証する、これまでの展覧会とは切り口を異にする展覧会です。

本展は、1974年のさまざまな事象をまとめた写真集『晴れた日』を基軸に、写真家としての篠山紀信を考察する上で、重要な作品116点を東京都写真美術館の2階・3階展示室を会場に、二部構成で展覧いたします。

「時代の並走者」が捉えた「時代のドキュメント」

本展の第1部は、1960年代のエネルギーに溢れた時代に相応しい新しい表現として評価された、初期の代表作〈誕生〉から、本展の核となる〈晴れた日〉、篠山が手がけた、雑誌『明星』の表紙の仕事により、1970年代に「アイドル」という新しいジャンルの文化を生み出すなど、篠山の幅広い活躍の原点となる主要作品で構成します。

第2部では、1980年代以降に写真集で発表された作品を中心に、篠山の最も息の長い仕事となる〈人間関係〉をはじめ、昭和から平成、さらに令和へと向かって、急速な変化を遂げる東京の姿をはじめ、東日本大震災がもたらした痕跡や、同時代を生きる人々を捉えたシリーズを紹介します。

「カメラマンは自分の生きている時代しか撮れないんだから、これはぼくにとって時代を複写していることにほかならないんです」と、自身を「時代の並走者」と評する篠山紀信が写し出す、「時代のドキュメント」を総覧する本展は、観る者の世代を越えて、篠山独自の写真表現の奥深い魅力、いわば「写真の魔力」を再認識する絶好の機会となることでしょう。

展覧会場のみ限定公開！篠山紀信のスペシャルインタビュー映像

本展では、篠山紀信の1970年代前半期までの、重要人物との「出会い」をテーマに、社会現象となった作品の誕生背景や、撮影時の知られざるエピソードなど、篠山紀信の作品を読み解くうえで、重要な手がかりとなる貴重なインタビュー映像を公開します。篠山が60年間ものあいだ写真を撮り続ける原動力に迫るインタビュー映像は、展示会場（2階ロビー）のみの限定公開となります。

[約30分、ループ上映]

「新・晴れた日 篠山紀信」展 関連図書

東京都写真美術館4階図書室では、本展の関連図書（雑誌、写真集、過去の展覧会情報等）をご紹介します。

ぜひ、展覧会とあわせて当館図書室をご活用ください。

※現在、図書室は「予約制」となっております。ご利用方法の詳細は図書室ホームページをご確認ください。

主な出品作品

[第1部]



〈誕生〉1968年

1961年の大学卒業制作から、篠山の作品は『カメラ毎日』で取り上げられ、その表現の完成度と新しい感性はたちまち注目された。〈誕生〉は、同誌で掲載された60年代の代表作の一つで、沖縄返還前に行くことのできた日本最南端の奄美の徳之島で撮影された。



〈晴れた日〉1974年 東京都写真美術館蔵

写真集『晴れた日』は雑誌『アサヒグラフ』の1974年5月から、半年間の連載を元に、同年の写真を加えたものである。取材対象は、毎回、話題となった出来事を追いかけたと言うが、美術から、エンターテインメント、プロからアマチュアまでのスポーツ、政治、そして人々の暮らしまで様々である。その幅広さゆえに、1974年における日本という時代を強烈に印象づけるものとなっている。

〈家〉[蔵座敷の家 山形県山形市]

1972年 東京都写真美術館蔵

〈家〉は、月刊誌『潮』の1972年1月号から、1975年12月号までの連載。撮影は北海道苫小牧から、沖縄県竹富島まで行われた。撮影対象には、赤坂迎賓館や市ヶ谷の大本営跡のような歴史的な建造物も含まれるが、農村地域の住居から、北九州の筑豊炭鉱の廃墟、あるいは東京のアパートや京都の茶屋など、時代の変化と共に、失われつつある日本の日常に目を向けている。住む人々の痕跡を印象的に浮かび上がらせたこの作品で、篠山は1976年のヴェネチア・ビエンナーレ日本館の代表作家に選ばれている。





[第2部]

〈TOKYO NUDE〉 [表参道・結晶のいろ] 1986-92年

1980年代後半から1990年中頃まで、バブル景気を背景に、風変わりなポストモダン建築が乱立し、人々の行動も変化した。変容する東京に対し、篠山は1983年よりこころみていた複数の写真機をつなぎ合わせ、イメージを連結させるシノラマを使って、精力的に制作を行った。撮影地をロケハンし、数多くのモデルを手配し、メイク、ライティングなど気の遠くなるような膨大な労力を使って撮影を試みている。

〈THE LAST SHOW〉 2010年

〈THE LAST SHOW〉は、吉田五十八設計の歌舞伎座の立て替えに伴う2010年の「歌舞伎座さよなら公演」を追ったドキュメンタリー。坂東玉三郎を中心に、舞台上だけでなく、会場入りの風景や若手たちの稽古、裏方、係員の姿までも取材し、最終公演に向かって高まっていく緊張感を捉えている。本作は千鶴楽の演目『助六由縁江戸桜』で幕が閉じる瞬間の玉三郎演じる花魁揚巻である。



〈ATOKATA〉 2011-18年

2011年3月11日、東日本大震災が発生。篠山は、同年の5月から秋まで、4回にわたって被災地を訪れ、撮影を行った。津波によってなぎ倒された木々や打ち上げられた漁船、倒壊した建物など、その恐るべきエネルギーをとらえていながらも、対照的な静かな自然の姿にも目を向けている。一方で、〈家〉において、家に刻み込まれた人々の痕跡を撮り続けたように、被災した家々の人々たちが慈しんだ行為や積み重ねられた時間に向かい合っている。



展覧会図録

『新・晴れた日 篠山紀信』 価格：未定／全145頁／A4変型判

発行：カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社 光村推古書院書籍編集部

アートディレクション・イラストレーション：細谷巖

関昭郎（東京都写真美術館学芸員、展覧会担当）による論考、作品リストほか出品作品図版を全点掲載。

5月18日より、ミュージアム・ショップまたはオンラインショップで発売。

NADiff BAITEN TEL.03-6447-7684

作家略歴



Photo by Yoshiki Nakano

篠山紀信 | Shinoyama Kishin

1940年東京生まれ。日本大学藝術学部写真学科在学中の61年に広告写真家協会展APA賞受賞。広告制作会社「ライトパブリシティ」を経て、68年よりフリー写真家として活動開始。66年東京国立近代美術館「現代写真の10人」展に最年少で参加。76年にはヴェネツィア・ビエンナーレ日本館の代表作家に選ばれるなど、その表現は早くから評価を受ける一方で、1971年より『明星』の表紙を担当して以降、写真家として時代を牽引する存在となる。70年日本写真協会年度賞、72年芸術選奨文部大臣新人賞、73年講談社出版文化賞、79年毎日芸術賞、98年国際写真フェスティバル金賞、2020年菊池寛賞など受賞歴多数。東京都写真美術館 第二期重点収集作家

開催概要

展覧会名[和] 新・晴れた日 篠山紀信

展覧会名[英] A New Fine Day: Shinoyama Kishin

会期 2021年5月18日(火)―8月15日(日) [80日間]

[第1部] 主催 | 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

会場 | 東京都写真美術館 3階展示室

[第2部] 主催 | 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

会場 | 東京都写真美術館 2階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 / 電話 03-3280-0099 / www.topmuseum.jp

開館時間 10:00-18:00 (入館は閉館30分前まで) ※現在、木・金20:00までの夜間開館は休止中

休館日 毎週月曜日 (月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館)

観覧料 共通チケット：一般1,200円、学生950円、中高生・65歳以上600円

(第1部もしくは第2部のみ：一般700円、学生560円、中高生・65歳以上350円)

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。

* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

* 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

電話 03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 / www.topmuseum.jp

展覧会担当 関 昭郎 a.seki@topmuseum.jp / 伊藤貴弘 t.ito@topmuseum.jp

広報担当 平澤 綾乃 / 池田 良子 / 鈴木 彩子 press-info@topmuseum.jp

本展は諸般の事情により内容を変更する場合があります。最新情報は当館ホームページをご確認ください。